

Title	心理的距離が対人認知プロセスに及ぼす影響：解釈レベル理論の観点から
Author	谷口, 友梨 / 池上, 知子
Citation	人文研究. 69 巻, p.99-114.
Issue Date	2018-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	三上雅子教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

心理的距離が対人認知プロセスに及ぼす影響： 解釈レベル理論の観点から

谷口友梨 池上知子

解釈レベル理論によると、対象を表象する方式は対象との間に知覚される時空間的距離（心理的距離）によって規定される。対象に対して心理的な遠さを知覚すると、高次レベルの解釈が促され、対象は抽象的に表象される。心理的距離が近い場合には、低次レベルの解釈が促され、対象は具体的に表象される。近年、この理論を対人認知場面に適用し、行為事象との間に知覚された心理的距離が行為者に対する推論にどのように影響するかが検討されている。しかし、まだ研究の数が少なく、体系だった知見の提供には至っていない。本稿では、心理的距離と対人認知の関係をとり上げている研究を概観し、これまでの対人認知研究で提起された種々の理論モデルや特性推論と動機推論をめぐる議論と関連づけながら、心理的距離が対人認知プロセスを規定するメカニズムについて論考する。

1. はじめに

家族や友人、職場の同僚や近隣の住人、街で見かける見知らぬ他人、テレビやインターネットを通じて知る著名人など、私たちの周囲には、実に多種多様な人物がおり、それらの人物が取るさまざまな行動を、日々、目にしている。そして、それらの人物が取った行動から、私たちは、行動が取られた経緯や動機、人物の性格などについて、あれこれ推論をめぐらす。その際に辿るプロセスは、人によって、状況によってさまざまである。これまでの対人認知研究では、対象人物の重要度や親密度など、知覚者と対象人物との個人的な関係性が判断に影響をもたらすとして多くの研究がなされてきた（e.g., Idson & Mischel, 2001; Fiske & Neuberg, 1990; Brewer, 1988）。しかし、近年の対人認知研究において、対象人物との個人的なかわり合いの要因以外に、対象人物に対して知覚された単純な時空間的距離が対象人物の表象方法を規定することが示されている。その背景には、Trope & Liberman (2003, 2010) によって提起された解釈レベル理論に基づく研究の興隆がある。解釈レベル理論は、対人認知に限らず、人間が対象を表象する際に用いる方略全般を包括的に論じる理論であるが、対人認知場面に適用する研究が登場するようになったことで、当領域に固有の新たな問題が提起されつつある。しかしながら、研究はまだ緒についたばかりであり、既存の対人認知の理論や知見との関連づけも十分になされておらず、体系だった見解を提出するには至っていない。そこで、本稿では、まず解釈レベル理論の骨子を述べ、この理論に基づいて心理的距離と対人認知の関係を検討した研究を概観する。そのうえで、それらの知見が対人認知プロセスに関する既存の理論モデル

のなかにどのように位置づけられるかを論考し、今後の研究の方向性を示すこととする。

2. 心理的距離による対象の解釈方法

我々は、遭遇した対象に対して注意を向け、その対象について解釈しようとする。このとき、対象との間に知覚された心理的距離によって、対象の解釈方法が規定される。このことを主張したのが、Trope & Liberman (2003, 2010) の解釈レベル理論である。この理論によると、対象が「今、ここ」から近いか遠いかという主観的経験（以下、心理的距離）によって、対象の表象方法が影響を受ける。心理的距離は自己中心的であり、基準点は、自分がまさに今いるこの場となる。心理的距離が遠いあるいは近いと知覚されるかは、あくまで主観的であるため、物理的、客観的距離とは異なる。また、対象からの心理的距離は線形関数ではなく、対数関数に従うとされている。

一般に心理的距離を遠く知覚するほど、対象は抽象的、構造的で一貫的、脱文脈的、本質的で中心にとらえられ、上位概念や目標に関連する高次レベルの解釈がなされやすくなる。一方、近く知覚するほど、具体的、詳細で複雑、非構造的で非一貫的、文脈依存的、副次的で周辺にとらえられ、下位概念や手段に関連する低次レベルの解釈がなされやすくなる (Trope & Liberman, 2003)。例えば、「テスト勉強をする」という行為に対し、上位の抽象的な表象方法がとられるときは、「なぜそれを行うのか」という観点から「成績を上げるため」というように解釈される。下位の具体的な表象方法がとられるときは、「どのようにそれを行うのか」という観点から「テキストを読む」というように解釈される。我々は、今、この場のみしか直接経験することができず、過去や未来、別の場所、現実とは別の可能性を経験することができない。このため、直接経験することができない事態に対しては、得られる情報が限られるため、偶発的とみられる周辺の特徴ではなく、不変のままである可能性が高い中心的特徴に焦点を当て、抽象的に表象することによって、「今、ここ」で経験した対象に対する解釈を凌ごうとすると考えられている。例えば、「テスト勉強をする」際、「テキストを読む」以外に「問題を解く」「(テスト範囲の内容を) 暗記する」というように「どのように行動するか」はその時々で変化する。一方、「成績を上げるため」という目標は変化する可能性が低い。このため、遠い事象に対しては具体的特徴ではなく、中心的特徴を用いた解釈方法が用いられる。

このような心理的距離と解釈水準の関係性は、定式化されたルールとして生体内に保持されており、さまざまな事象に対して「過剰般化 (over-generalized)」すると考えられている。これを裏付けるべく、Bar-Anan, Liberman, & Trope (2006) が、対になった概念間の潜在的な連合を測定する潜在連合テスト (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) を用いて検討を行っている。この研究では、「遠い」と「近い」という心理的距離における2つの概念と「高次レベル」と「低次レベル」という解釈水準における2つの概念との潜在的な連合の強さ

を測定しているが、「遠い」という概念は「高次レベル」の解釈と、「近い」という概念は「低次レベル」の解釈とそれぞれ強く連合していることが示された。つまり、心理的距離と解釈水準は潜在レベルで連合しており、一方の概念が活性化すると他方の概念もまた活性化することが示唆される。

このことを実証的に検討しているのが、Liberian & Förster (2009a) である。彼らは、実験参加者に明日（近）、もしくは1年後（遠）の生活についてエッセーを書くことで時間的距離感をプライミングさせ、Navon (1977) の考案した注意テストを実施した。このテストは、小さなアルファベット文字で構成された大きなアルファベット文字 (e.g., 20 の小さな H で構成された L) をスクリーンに呈示し、ターゲットのアルファベット文字 (L (全体文字) または H (部分文字)) がスクリーン上にあるかどうかの判断を求めるというものであった。その結果、エッセーを書くというプライミングを行わなかった条件に比べて、1年後の生活についてエッセーを書くことで時間的な遠さをプライミングされた条件では、L (全体文字) の認知が促進され、H (部分文字) の認知が阻害された。一方、明日の生活についてエッセーを書くことで時間的な近さをプライミングされた条件では、逆の効果が示され、H (部分文字) の認知が促進され、L (全体文字) の認知が阻害された。この結果は、対象に関して同一の情報が利用可能であったとしても、心理的距離を遠く知覚すると、利用可能な情報のうち、全体的特徴に焦点が当てられ、対象は抽象的に解釈されやすいこと、一方、近く知覚すると、部分的特徴に焦点が当てられ、対象は具体的に解釈されやすくなることを意味している (Trope & Liberman, 2010)。

逆に、解釈水準が心理的距離に影響することも示されている。Liberian & Förster (2009b) の研究では、上述した注意テストを用い、全体文字の同定を促し全体処理をプライミングさせた場合、参加者は部屋の壁に貼ってあるステッカーと自分自身との間の距離を遠く知覚した。反対に、部分文字の同定によって部分処理をプライミングさせた場合、同様のステッカーに対して近く知覚することが示された。これらのことより、心理的距離と解釈水準は互いに密接にかかわっており、一方の知覚によって他方の処理に影響を受けることがわかる。

対象に対する心理的距離の効果は対人認知場面においても認められることが示されている。ただし、これまでのところ、対人認知場面における心理的距離の効果に関する研究は、我々が他者の行動を観察した際の原因推論（原因帰属）にかかわるプロセスへの影響に集中している。そこで、次節では、対人認知における原因推論に関する既存の理論や知見を概観し、その後、それらと心理的距離との関係について論じる。

3. 対人認知プロセス

3-1. 過度の内的帰属

我々は他者のどの側面に注目し、他者についてどのように判断するのかという問題は、1950

年代から検討され続けてきた。我々が他者について判断を行う際、主に焦点を当てるのは、その人物のとった行動である。Heider (1944, 1958) によると、我々は人物の行動を観察した際、その行為の原因を行為者自身の内的属性に帰属しやすい傾向を持っている。例えば、「ジョンが友人を殴った」という行動事象を目撃すると、「ジョンは乱暴者だ」という行為者の性格特性が推論され、それが行為の原因として判断される。我々が他者の行動からその人物の傾性を読み取ろうとするのは、人物の内的特性に関する情報を得ることによってその人物の将来の行動の予測を可能にし、その予測に応じて適切な対処行動を準備できるためであると考えられている (外山, 2005)。

Jones & Harris (1967) は、対人認知において通常みられる内的帰属傾向に関する実証的研究を行っている。彼らは、ターゲット人物が自由意志によってまたは強制されて書いたとするエッセーを実験参加者に呈示し、ターゲット人物の真の態度について推測することを求めた。その結果、母集団における生起確率が低い行動をのぞき、全般的にターゲット人物がたとえ強制されてエッセーを書いた場合であったとしても、エッセーで表明されている態度 (行動) とターゲット人物の真の態度は対応していると判断された。

Jones & Harris (1967) の研究は、ターゲット人物の態度を推測する際、外的圧力の有無は考慮されにくいことを示している。ターゲット人物の置かれている状況のような外的要因の影響を無視し、行動の原因を行為者の内的属性に過剰に帰属してしまう現象は対応バイアスとよばれている (e.g., Gilbert & Malone, 1995)。外的要因の影響が考慮されにくい理由は、次のように説明される。観察者は、ターゲット人物の行動は物理的に知覚できる。しかし、状況がターゲット人物に与えている影響そのものはターゲット人物の心の中のみ存在し、観察者は五感で直接知覚することができない。そのため、状況の影響に気づきにくく考慮されにくくなるのである (Gilbert & Malone, 1995)。

3-2. 潜在レベルの処理と顕在レベルの処理

現在、対人認知研究では二重過程モデルが主流である。他者の行動を観察した際、人は潜在レベルと顕在レベルの両方のレベルで他者についての推論を行う (Gawronski, & Bodenhausen, 2011)。潜在レベルの推論は無自覚、無意図的になされる処理であり、環境から何らかの刺激を受け取ると、これまでの経験に基づいて形成された連合ネットワークが活性化することで自動的に生起する。そのため、限りある認知資源を節約しながら予測を速やかにを行い、将来に備えることができる。ただし、潜在レベルの処理は単純な連合ネットワークを介する知識の活性化に止まっているため、情報の正確さについての精査は行われない。

一方、顕在レベルの処理は、活性化した情報の妥当性について論理的・一貫性の観点から検証がなされ、かつ、潜在レベルで生じた推論を統合する役割を担っている (e.g., Trope & Gaunt, 1999)。顕在レベルでの処理は認知資源や心的努力を要するため、刺激を正確に処理しようと

動機づけられていない場合には、仮に潜在レベルでの処理が誤っていたとしても、顕在レベルの処理でもまた潜在レベルの処理がそのまま反映されてしまう。

これら2種類の処理過程の生起順序については、まず、潜在レベルの処理が生起し、その後、顕在レベルの処理が生起すると想定されている。例えば、Gilbert (1989) が提起した三段階モデルによると、他者の行動を観察した際、その行動がどのような性質を持つものであるかを同定するカテゴリ化が行われ（第1段階）、カテゴリ化に基づき、行動に対応する特性を推論する特性記述が生じる（第2段階）。その後、その行動の生起状況も含め行動の原因の吟味が行われ、外的要因が存在する場合には、第2段階で推論された特性を見直し修正が行われる（第3段階）。

三段階モデルにおける第1、第2段階は意識することなく自動的に生じるが、第3段階は認知資源を必要とする意識的な処理であると考えられている。そのため、他者の行動について推論を行おうという意思がない場合や認知資源が不足している場合は、第1、第2段階で処理は停止し、第3段階は生起しない。結果的に、ターゲット人物の行動はその原因が内的属性に過剰に帰属され、行動と行為者の性格特性の対応性が高く判断される。これが、対応バイアスが生じる理由であると考えられている (e.g., Gilbert, Pelham, & Krull, 1988)。

3-2-1. 潜在レベルで生じる行為者の特性の推論

上述したとおり、Gilbert (1989) の三段階モデルのうち、第1、第2段階の処理は自動的に、つまり潜在的に生じる。このことを実験的に示したのが、Winter & Uleman (1984) の研究である。彼らは実験参加者に、人物の特性が含意されているような行動文 (e.g., 配管工は妻の財布にそっと50ドルを忍び込ませた) を呈示し、よく観察することを求めた。短期記憶から情報を除外するための妨害課題を挿入した後、先に呈示した行動文の偶発再生を求めた。再生を行うにあたり、行動文を再生するための手がかりとして、行動が含意した特性語 (e.g., 気前のよい) を呈示したところ、高い再生率が得られた。これは、含意特性語が行動文を想起するための手がかりとして機能したことを意味しており、印象形成教示を行っていなかったにも関わらず、参加者は行動文の呈示中に自発的に特性を推論していたことを示唆するものである。この現象は自発的特性推論とよばれている。

3-2-2. 自発的特性推論の特徴

自発的特性推論は、様々な手法を用いて多くの研究が行われ、その特徴が明らかにされている。まず、自発的特性推論が生じるのは、行動の符号化段階であると考えられている。Uleman, Hon, Roman, & Moskowitz (1996) の研究では、McKoon & Ratcliff (1986) の再認プローブ課題を用いて検討が行われた。まず、特性が含意された行動文 (e.g., 出発する前、彼は全員のシートベルトを確認した) または含意されていない行動文 (e.g., 誰もシートベルトを確

認せずに出発した)を呈示した後、特性語(e.g., 用心深い)を呈示し、先に呈示した記述文の中でその特性語を「見た(old)」か「見ていない(new)」か判断することを求める。特性語は記述文の中には記載されていないため、正反応は「見ていない(new)」となる。ただし、彼らの結果では、特性が含意されていない行動文よりも含意された行動文が呈示された場合の方が、特性語を「見た(old)」という誤反応の割合(虚再認率)が高くなることが示された。これは、特性が含意された行動文が呈示された際、行為者の特性が推論され、記憶内に格納されたことを表す。その結果、再認課題において、記述文を読んだ際に特性語を「見た(old)」と誤って認識し、特性語に対する誤反応が増えたと考えられる。符号化段階で推論された特性が単語の再認課題を妨害したと解釈できる。

加えて、自発的特性推論は特性情報の単なる活性化ではなく、行為者に対する帰属処理であることが示されている。例えば、Todorov & Uleman (2002)は、行動文と人物の顔写真を対呈示し、その後、再認課題を行う際、半数の顔写真を対呈示された行動文に含意される特性語(含意特性語)と組み合わせて呈示し、残り半数の顔写真については、別の顔写真と対呈示された行動文の含意特性語と組み合わせて呈示した。すると、行動文呈示時と再認課題時の顔写真と含意特性語の組み合わせが対応している場合の方が対応していない場合よりも特性語に対する虚再認率が高くなった。この結果は、行動文を呈示された際、自動的に活性化した特性概念が行為者情報として記憶されることを示唆するものである。また、一旦記憶された特性は行為者情報として比較的長期間、保持されるとの指摘もある(Carlston & Skowronski, 2005)。さらに、McCarthy & Skowronski (2011)は、ターゲット人物に対して自発的に特性が推論されると、推論した特性に基づいて、その人物の将来の行動を予測することを示している。つまり、自発的に推論された特性は顕在的な他者判断に影響する。

4. 特性推論に対する心理的距離の影響

近年、人物の行動から行為者の内的傾性を推論するという現象は行為事象との間に知覚された心理的距離によって規定されることが報告されている。例えば、Henderson, Fujita, Trope, & Liberman (2006, Study 2)は、Jones & Harris (1967)の手法を用いて、空間的距離が遠いあるいは近い人物が自由意志もしくは強制されて書いたとされるエッセーを実験参加者に呈示し、エッセーの書き手の真の態度を推測させている。その結果、空間的距離が近い人物よりも遠い人物のほうが、強制されて書いたと伝えられた場合でも、エッセーの内容は書き手の真の態度を反映していると判断されやすかった。対象に対する心理的距離を遠く知覚すると中心的特徴である行動(エッセーの内容)に焦点が当てられやすくなり、周辺の特徴である状況要因(強制されたか、自由意志であったか)は考慮されにくくなるといえる。その結果、対応バイアスが生じる。一方、対象との間の心理的距離を近く知覚すると周辺の特徴である状況要因

にも焦点が当てられやすくなり、対応バイアスは生じにくくなる。つまり、心理的距離によって対象に対する焦点の当て方が規定されるのである。

加えて、心理的距離は対象に対する焦点の当て方だけでなく、対象の表象方法にも影響する。Trope & Liberman (2010) は、行為事象との間の心理的距離によって人物の行動を記述する際の解釈水準が変化するが、その際の解釈水準はSemin & Fiedler (1988) の言語カテゴリモデルに対応すると述べている。このモデルによれば、人物の行動を描写する際の表現方法が抽象度に応じて4つの言語カテゴリに分類される。最も抽象度の低い具体的な表現方法は、直接観察可能な事実のみ言及する記述動詞を用いる (e.g., 「離れる」「持つ」) というものである。その次が、文脈知識に基づき行動の目標や意味付けを行う解釈動詞 (e.g., 「偽る」「助ける」) を用いる表現方法である。3つめは、行為者の心的状態に言及する状態動詞 (e.g., 「好む」「理解する」) を用いた表現方法である。最も抽象的であるとされているのは人物 (行為者) の性格特性 (e.g., 「やさしい」「親切な」) に言及する表現方法である。解釈レベル理論に基づけば、この表現方法はターゲット人物との心理的距離が近い場合よりも遠い場合に用いられやすいと考えられる。なぜなら、心理的距離を遠く知覚すると中心的特徴である行為自体に焦点があてられやすく、周辺的特徴である行動の生起状況は考慮されにくくなるからである。加えて、心理的距離を遠く知覚するほど、行為事象は抽象的に解釈されやすく、最も抽象度の高い性格特性の観点から行為事象は表象されやすくなるからである。前述したように、我々は行為事象から、その行為者の性格特性を自発的に推論する傾向を持っているが、このような自発的特性推論は、上述した言語カテゴリモデルに照らしたとき、抽象的な特性形容詞を用いた表現方法に相当する。したがって、自発的特性推論も心理的距離の影響を受けることが予想される。

Rim, Uleman, & Trope (2009) は、心理的距離 (実験1では空間的距離、実験2では時間的距離を用いている) が遠い人物または近い人物の行動を観察した際の自発的特性推論の生起量を再認プローブ課題を用いて比較した。その結果、空間的距離、時間的距離のいずれにおいても、心理的距離が近い場合よりも遠い場合の方が特性が自発的に推論されやすいことが示された。これは、潜在レベルで生起する推論であるとみなされている自発的特性推論が心理的距離の影響を受けることを示すものである。顕在レベルの推論については、Henderson et al. (2006, Study 2) において対応バイアスの生起が心理的距離の影響を受けることが示されていることから、心理的距離は対人認知場面において顕在、潜在の両レベルにおいて影響することが示唆される。

我々は、特性の観点から人物を評価する傾向をもっており、心理的距離を遠く知覚するほど、その傾向は生じやすい。換言すれば、心理的距離を近く知覚するほどそれは抑制されることになる。それでは、行為事象に対して知覚された心理的距離が近い場合、どのような推論が生じているのだろうか。これまでの対人認知研究の多くはターゲット人物に対する特性推論に関す

るものであり、心理的距離が遠い場合には特性推論が促されることが明らかになっているものの、心理的距離が近い場合にどのような推論が生じているかについてはほとんど検討がなされていない。Gilbert (1989) や McCarthy & Skowronski (2011) が述べているように潜在レベルの推論は顕在レベルの推論に影響するため、心理的距離によって自発的推論の生じ方が異なる場合、その後の顕在レベルの推論もまた変化する可能性がある。つまり、心理的距離が遠い場合と近い場合において対人認知のプロセスが異なる可能性を指摘できる。

Henderson et al. (2006, Study 2) の研究では、心理的距離が近い場合、行動の生起状況も考慮したうえで人物の真の態度について判断がなされやすくなることが示された。また、Semin & Fiedler (1988) の言語カテゴリモデルにあるように、我々が他者の行動を描写する際には、特性以外の記述方法も存在する。対人認知研究においても、最近では、特性以外の推論についても関心が高まっている。そこで、次節では、そうした対人認知研究の新しい動向を紹介するとともに、特性以外の自発的推論と心理的距離の関係について議論し、心理的距離が近い場合にどのような推論が生じるのか、さらに、心理的距離が遠い場合と近い場合の対人認知プロセスの違いについて考察する。

5. 特性以外の推論

5-1. 対人認知プロセス

近年、人物の特性や傾性を推論するにあたって、単純に行動のみが考慮されるのではなく、様々な要因が推論において考慮されるとする対人認知モデルが提起され始めた。例えば、Trope & Gaunt (1999) が提起した統合モデルでは、他者の行動、状況、ターゲット人物に関する過去の知識といった種々の情報が吟味され、それらが統合され、他者の行動について判断がなされると論じている。

2000年代に入り、対人認知研究では、ターゲット人物の行動の背後にある動機や目標について焦点が当てられるようになった。例えば、Reeder, Vonk, Ronk, Ham, & Lawrence (2004) が提起した多重推論モデルはその代表例といえる。これは、ターゲット人物の行動からその人物の特性や印象を形成するにあたり、その人物の置かれた状況から行動の目標や動機を推測し、それによって、その人物の行動に対する評価が変わるというものである。例えば、「サラが教授を手助けした」という行動は、それ自体は「親切な」行動である。しかし、「サラが手助けした教授は、サラがノミネートされた賞金 1000 ドルの賞の審査員であり、その教授は親切な学生を好む」という情報が伝えられた場合、サラの行動の動機は「利己的」なものと捉えられ「親切な」行動とは判断されなくなった。これは実験参加者が、サラは「教授に気に入られるため」に手助けしたと解釈したためであると考えられる。我々が日々とる行動は、たとえ同一の行動であったとしても、状況によって、行動の目標や動機は異なる。そして、先のサラの行

動のように、行動の持つ意味は目標や動機に依存する。したがって、人はターゲット人物について正しく理解するために、まず、その人物の取った行動の背後にある意図や動機を理解しようとするというのが著者らの主張である。

Trope & Gaunt (1999) の統合モデルや Reeder et al. (2004) の多重推論モデルのいずれにおいても、Gilbert (1989) が提起した 3 段階モデルとは異なり、行為者の置かれた状況の推論が先行し、特性推論を行う際に考慮されている。いずれのモデルが適切であるか、すなわち、特性推論と状況推論ないし動機推論のいずれが先行するかは、現在も論争が続いている。

5-2. 特性以外の自発的推論

上記の研究は、対人認知における顕在レベルの推論を扱っているが、近年、潜在レベルの推論においても、行為者の特性だけではなく、行為者が置かれていた状況や行為の目標が自発的に推論されることが示されるようになってきた (Lupfer, Clark, & Hutcherson, 1990; Hassin, Aarts, & Ferguson, 2005)。例えば、「ビジネスマンとその恋人は、人が混み合い皆が互いにぶつかり合っているダンスフロアで踊っている」という行動文から、踊っている場所が「狭い」という状況が推論されることや、「父親はスプーンを持って子どもに“忍者タートルでさえステーキが好きだよ”と言った」という行動文から「(食事を) 食べさせる」という行為者の意図や目標が自発的に推論されることが報告されている。これらの知見から、Gilbert (1989) のモデルで想定されている以上に、多くの要因が知覚者の意図を介さずに自動的に考慮されていることが窺える。

では、これら潜在レベルで自発的に生起するさまざまな推論は互いにどのように関連しているのだろうか。Ham & Vonk (2003) の研究では、自発的特性推論と自発的状況推論は共起することが報告されている。例えば、「ジョンがテストで A をとった」という行動を知ると、「(ジョンは) 賢い」という性格特性と「(テストが) 簡単」という状況が同時に自発的に推論される。

また、特性推論は状況推論だけではなく、目標推論とも共起することが示されている (Ham & Vonk, 2011)。ただし、状況推論とは異なり、特性推論と目標推論については単に共起するのではなく、目標推論が特性推論に先立って生じているということが Van Overwalle, Van Duynslaeger, Coomans, & Timmermans (2012) によって近年主張されている。彼らは、再認プローブ法を用いた実験を行い、再認課題において反応制限時間を設けて含意特性語と含意目標語に対する虚再認の生起率から両者の再活性化の速さを比較した。その結果、反応制限時間が短い場合、虚再認は含意目標語でのみみられ、反応制限時間が長くなるにしたがって含意特性語に対する虚再認が現れた。つまり、特性推論よりも目標推論の方が記憶痕跡が強く、素早く再活性化されることが示唆された。これは、自発的特性推論に対する自発的目標推論の優位性を示すものであり、Reeder et al. (2004) が主張したように他者を理解するための基本的

な手がかりは他者の目標や動機であるため、特性推論よりも目標推論が優勢になると考えられる。Van Overwalle et al. (2012) は上記の結果に基づき、他者の行動を観察した際、まず行為者の目標を自発的に推論し、推論した目標に基づいて特性を推論すると主張した。ただし、彼らは、特性推論と目標推論をそれぞれ別の参加者を用いて測定し検討を行ったため、両推論の時間的順序について直接検討しているわけではない。

目標推論と特性推論の因果関係を直接検討したものとして、Taniguchi & Yagi (2017) がある。彼らは、自由選択または強制された状況下でターゲット人物が人を手助けした行動を参加者に呈示し、よく読むことを求めた。その後、行為者に対する潜在的な態度を Go/No-Go Association Task (Nosek & Banaji, 2001) を用いて測定し、目標推論と特性推論の因果関係について検討を行った。その結果、自由意志で人を手助けした行動に対しては、特定の推論教示を行っていなかったにもかかわらず、「(相手を) 助けようしている」という目標が推論され、推論された目標に基づいて、「(行為者は) 親切」という特性が推論されることが示された。一方、手助けを強制された場合では、特定の目標や特性は推論されなかった。これにより、Van Overwalle et al. (2012) で主張されたように目標推論が特性推論に先立って生じることが実験的に示された。加えて、潜在レベルの推論であったとしても、まず、行動が生じた状況からターゲット人物の意図の有無を判断し、自らの意思で行動しているということが判断された場合に限り、目標推論、特性推論が生じることが示唆された。

6. 心理的距離と対人認知

以上にみてきたように、我々は他者の行動から特性以外の様々な事象についても推論する。では、これら特性以外の推論は、心理的距離の影響をどのように受けるのであろうか。

6-1. 心理的距離と自発的推論

行為事象に対して知覚された心理的距離が近い場合、具体的、文脈的、周辺のな特徴に焦点が当てられやすくなる。Henderson et al. (2006, Study 2) の研究では、強制されて書かれたとされるエッセーから書き手の真の態度を推測する際、行為事象との心理的距離が遠い場合よりも近い場合の方が、エッセーの内容が書き手の真の態度を表していると判断されにくかった。これは、「強制された」という行為の生起状況が考慮されたためであると考えられる。つまり、ターゲット人物の行為の生じた状況は、対人認知場面における具体的、文脈的、周辺のな特徴に該当すると考えられ、心理的距離が近い場合において考慮されやすくなることが推察される。

一方、対人認知場面で自発的に推論される事象を言語カテゴリモデルに照らし合わせてみたとき、目標推論は解釈に関係し、文脈知識を必要とする表現に該当すると考えられる。例えば、

「電車でおばあさんに席を譲った」という行為から推論される行為の目標は「(おばあさんを)助ける」ことである。この目標を推論するためには「おばあさんが電車内で席に座れずに困っていた」という文脈知識を用いた行為の評価の意味づけ(「だから助けようとしている」)を行う必要がある。加えて、上述した Reeder et al. (2004) や Taniguchi & Yagi (2017) は、ターゲット人物の置かれた状況から、その人物の目標や動機が推論されることを示している。これより、行為事象との間の心理的距離が近い場合、状況推論が自発的に生じ、推論された状況に基づいて行為者の動機や目標が自発的に推論されやすくなると考えられる。

それでは、目標推論と心理的距離の関係はどのように予測できるであろうか。Trope & Liberman (2010) は、「なぜ」という内容に該当する目標は上位概念に当てはまると述べている。ただし、言語カテゴリモデルによると、目標推論に相当する解釈動詞を用いた表現方法より、抽象的な形容詞である特性を用いた表現方法の方が抽象度が高い。加えて、目標を推論するためには状況を含む文脈知識が必要であり、状況が考慮されるのは、心理的距離を近く知覚した行為事象に対して推論を行う場合である。以上のことより、自発的状況推論と同様に、自発的目標推論についても、心理的距離が遠い場合よりも近い場合の方が生じやすいのではないかと推察される。

6-2. 心理的距離が対人認知プロセスに及ぼす影響

以上みてきたように、行為事象との心理的距離によって、生じやすい自発的推論が異なる可能性があるなら、心理的距離が遠い場合と近い場合では生起する対人認知プロセスが異なることを仮定できる。一般に対人認知場面では、潜在レベルの推論が、後続の顕在レベルの判断に反映されると考えられている。例えば、自発的特性推論が行動予測に利用されるようにである (McCarthy & Skowronski, 2011)。しかし、自発的特性推論は心理的距離が遠い場合に生じやすいとすれば (Rim et al., 2009)、行動事象を観察した際に自発的特性推論が生じ、推論した特性に基づいた行動予測が行われるという一連のプロセスは、行為事象に対し心理的距離を遠く知覚した場合に見られやすいことが考えられる。一方、心理的距離が近い場合は、周辺の特徴である行動の生起状況に焦点が当てられやすく、状況が自発的に推論される。加えて、推論された状況に基づき目標が自発的に推論されやすくなる。潜在レベルの推論は顕在レベルの判断に影響するならば、推論された状況または目標に基づいた行動の予測がなされると考えられる。

6-3. 対人認知プロセスに対する認知的精緻化処理の影響

ただし、潜在レベルで生じた推論は必ずしも顕在レベルの判断において利用されるわけではない。換言すれば、顕在レベルの他者判断は潜在レベルの推論に常に対応するとは限らない。例えば、上述した Gilbert (1989) の三段階モデルでは潜在レベルの推論が顕在レベルにおい

て修正されると考えられている。また、対象についての情報を処理する際、認知的に精緻な処理がなされない場合は、その対象に対する潜在的評価と顕在的評価は一致するが、十分に認知的に精緻な処理がなされた場合は、潜在的評価と顕在的評価は必ずしも対応するわけではないことが指摘されている (Gawronski & Bodenhausen, 2011)。Florack, Scarabis, & Bless (2001) の研究では、認知欲求が低い場合、対象に対して潜在的な評価に基づいて判断しやすくなるのに対し、認知欲求が高い場合、潜在的な評価と他者判断は対応しないことが示されている。つまり、認知的に精緻な処理が促されると顕在的評価は潜在的評価の影響を受けにくくなり、さまざまな判断材料を考慮し、熟慮したうえで対象に対する判断がなされる。

Gawronski & Bodenhausen (2011) の主張や Florack et al. (2001) の知見に鑑みると、心理的距離が異なる行為事象を観察した場合、距離に応じた推論が自発的に生じるものの、対象に対する認知的に精緻な処理が促された場合とそうでない場合においては、その後の顕在レベルの処理が異なる可能性がある。認知的に精緻な処理が促されない場合、潜在的評価と顕在的評価は対応する。したがって、心理的距離が遠い場合、特性が自発的に推論されやすく、顕在レベルでは推論した特性に沿った予測がなされるだろう。一方、心理的距離が近い場合、状況や目標が自発的に推論されやすく、顕在レベルにおいて推論した状況や目標に基づいた予測がなされると考えられる。これに対し、認知的に精緻な処理が促された場合、潜在レベルで自発的に特性や状況、目標が推論されたとしても、顕在レベルにおいてそれらを利用しなくなる、または修正がなされると想定される。例えば、裁判員裁判において被告人の処遇を決定する場合や、援助要請者を援助するか否かを決定する場合、裁判員や援助者の判断がターゲット人物の将来に大きく影響する。このような場合、ターゲット人物に対して認知的に精緻な処理がなされると考えられる。裁判員裁判の場合であれば、被告人に対し犯罪行為から「卑劣な」という特性を自発的に推論したとしても、顕在レベルにおいて正確さが動機づけられるため、状況要因にも焦点が当てられ推論の修正がなされる。一方、犯罪行為の生起状況から「ふぐうな(状況だ)」と自発的に推論したとしても、顕在レベルにおいて犯罪行為自体にもさらに目が向けられ推論の修正がなされると推察される。ただし、上述したように、対人認知場面において心理的距離が近い場合に生起する推論、自発的推論に対する認知的精緻化の影響についてはほとんど検討されていないため、考察の域をでない。今後、知覚された心理的距離によって生じやすい自発的推論がどのように異なるのか、また心理的距離によって異なる潜在レベルでの推論が、その後の顕在レベルの他者判断にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする必要がある。

7. まとめ

対人認知場面において、我々は、通常、人物の行動から性格特性を推論する傾向を有してい

るが、他者の行動から常に特性を推論するのではなく、それは行為事象との間に知覚された心理的距離によって規定される。ただし、行為事象との心理的距離が遠い場合、特性が自発的に推論されやすいことは明らかになっているが、特性推論が抑制される心理的距離が近い場合の対人認知プロセスはほとんど明らかにされていない。加えて、一般に潜在レベルの処理は顕在レベルの処理に影響するが、潜在レベルの推論が心理的距離の影響を受けた場合、顕在レベルの処理にどのように影響するのかという点も未検討である。特性以外の状況や目標といった事象についても検討を行うことによって心理的距離が遠い場合と近い場合における対人認知のプロセスモデルを提起することが求められる。

これまでの研究では、様々な対人認知プロセスのモデルが提起されてきたものの、いずれのモデルが正しいかは明確な結論は得られていない。しかし、心理的距離が遠い場合と近い場合において生じる対人認知プロセスが異なるのであれば、これらを解明することで既存の様々な対人認知モデルを統合的に理解する枠組みを提起することもできよう。例えば、Gilbert (1989) の三段階モデルと Reeder et al. (2004) の多重推論モデルは異なるプロセスが仮定されているが、前者が心理的距離を遠く知覚した場合、後者が心理的距離を近く知覚した場合に辿る対人認知プロセスである可能性を指摘できるかもしれない。行為事象に対する心理的距離による対人認知プロセスへの影響を明らかにすることは、今後の対人認知研究にとってきわめて有用であるといえる。

【引用文献】

- Bar-Anan, Y., Liberman, N., & Trope, Y. (2006). The association between psychological distance and construal level: Evidence from an implicit association test. *Journal of Experimental Psychology: General*, *135*, 609-622.
- Brewer, M. B. (1988). A dual process model of impression formation. In T. K. Srull & R. S. Wyer, Jr. (Eds.), *Advances in Social Cognition* (Vol. 1, pp. 1-36.). Lawrence Erlbaum Associates.
- Carlston, D. E., & Skowronski, J. J. (2005). Linking versus thinking: Evidence for the different associative and attributional bases of spontaneous trait transference and spontaneous trait inference. *Journal of Personality and Social Psychology*, *89*, 884-898.
- Casasanto, D., & Boroditsky, L. (2008). Time in the mind: Using space to think about time. *Cognition*, *106*, 579-598.
- Fiske, S. T., & Neuberg, S. L. (1990). A continuum of impression formation, from category-based to individuating processes: Influences of information and motivation on attention and interpretation. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol. 23, pp. 1-74). New York: Academic Press.
- Florack, A., Scarabis, M., & Bless, H. (2001). When do associations matter? The use of automatic associations toward ethnic groups in person judgments. *Journal of Experimental Social Psychology*, *37*, 518-524.
- Gawronski, B., & Bodenhausen, G. V. (2011). The associative-propositional evaluation model: Theory, evidence, and open questions. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol. 44, pp. 59-127). New York: Academic Press.
- Gilbert, D. T., & Malone, P. S. (1995). The correspondence bias. *Psychological Bulletin*, *117*, 21-38.

- Gilbert, D. T. (1989). Thinking lightly about others: Automatic components of the social inference process. In J. S. Uleman & J. A. Bargh (Eds.), *Unintended thought* (pp. 189-211). New York: Guilford.
- Gilbert, D. T., Pelham, B. W., & Krull, D. S. (1988). On cognitive busyness: When person perceivers meet persons perceived. *Journal of Personality and Social Psychology, 54*, 733-740.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1988). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 1464-1480.
- Ham, J., & Vonk, R. (2003). Smart and easy: Co-occurring activation of spontaneous trait inferences and spontaneous situational inferences. *Journal of Experimental Social Psychology, 39*, 434-447.
- Ham, J., & Vonk, R. (2011). Impressions of impression management: Evidence of spontaneous suspicion of ulterior motivation. *Journal of Experimental Social Psychology, 47*, 466-471.
- Hassin, R. R., Aarts, H., & Ferguson, M. J. (2005). Automatic goal inferences. *Journal of Experimental Social Psychology, 41*, 129-140.
- Heider, F. (1944). Social perception and phenomenal causality. *Psychological Review, 51*, 358-374.
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. Wiley. 大橋正夫 (訳) 1978 対人関係の心理学 誠信書房
- Henderson, M. D., Fujita, K., Trope, Y., & Liberman, N. (2006). Transcending the “here”: The effect of spatial distance on social judgment. *Journal of Personality and Social Psychology, 91*, 845-856.
- Idson, L. C., & Mischel, W. (2001). The personality of familiar and significant people: The lay perceiver as a social-cognitive theorist. *Journal of Personality and Social Psychology, 80*, 585-596.
- Jones, E. E., & Harris, V. A. (1967). The attribution of attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology, 3*, 1-24.
- Liberman, N., & Förster, J. (2009a). The effect of psychological distance on perceptual level of construal. *Cognitive Science, 33*, 1330-1341.
- Liberman, N., & Förster, J. (2009b). Distancing from experienced self: How global-versus-local perception affects estimation of psychological distance. *Journal of Personality and Social Psychology, 97*, 203-216.
- Lupfer, M. B., Clark, L. F., & Hutcherson, H. W. (1990). Impact of context on spontaneous trait and situational attributions. *Journal of Personality and Social Psychology, 58*, 239-249.
- McCarthy, R. J., & Skowronski, J. J. (2011). What will Phil do next? Spontaneously inferred traits influence predictions of behavior. *Journal of Experimental Social Psychology, 47*, 321-332.
- McKoon, G., & Ratcliff, R. (1986). Inferences about predictable events. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition, 12*, 82-91.
- Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2001). The go/no-go association task. *Social Cognition, 19*, 625-664.
- Navon, D. (1977). Forest before trees: The precedence of global features in visual perception. *Cognitive Psychology, 9*, 353-383.
- Reeder, G. D., Vonk, R., Ronk, M. J., Ham, J., & Lawrence, M. (2004). Dispositional attribution: Multiple inferences about motive-related traits. *Journal of Personality and Social Psychology, 86*, 530-544.
- Rim, S., Uleman, J. S., & Trope, Y. (2009). Spontaneous trait inference and construal level theory: Psychological distance increases nonconscious trait thinking. *Journal of Experimental Social Psychology, 45*, 1088-1097.
- Semin, G. R. & Fiedler, K. (1988). The cognitive functions of linguistic categories in describing persons: Social cognition and language. *Journal of Personality and Social Psychology, 54*, 558-568.
- Taniguchi, Y., & Yagi, Y. (2017). Can spontaneous trait inferences be based on spontaneous motive inferences? *Ritsumeikan Journal of Human Sciences, 35*, 103-114.

- Todorov, A., & Uleman, J. S. (2002). Spontaneous trait inferences are bound to actors' faces: Evidence from a false recognition paradigm. *Journal of Personality and Social Psychology, 83*, 1051-1065.
- Trope, Y., & Gaunt, R. (1999). A dual-process model of overconfident attributional inferences. In S. Chaiken & Y. Trope (Eds.), *Dual-process theories in social psychology* (pp. 161-178). New York: Guilford Press.
- Trope, Y., & Liberman, N. (2003). Temporal construal. *Psychological Review, 110*, 403-421.
- Trope, Y., & Liberman, N. (2010). Construal-level theory of psychological distance. *Psychological Review, 117*, 440-463.
- 外山みどり (2005). 基本的な帰属のエラー 山本 真理子・外山みどり・池上知子・遠藤由美・北村英哉・宮本聡介 (編) 社会的認知ハンドブック (pp. 196-197) 北大路書房
- Uleman, J. S., Hon, A., Roman, R. J., & Moskowitz, G. B. (1996). On-line evidence for spontaneous trait inferences at encoding. *Personality and Social Psychology Bulletin, 22*, 377-394.
- Uleman, J. S., Newman, L. S., & Moskowitz, G. B. (1996). People as flexible interpreters: Evidence and issues from spontaneous trait inference. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol. 28, pp. 211-279). San Diego, CA: Academic Press.
- Van Overwalle, F., Van Duynslaeger, M., Coomans, D., & Timmermans, B. (2012). Spontaneous goal inferences are often inferred faster than spontaneous trait inferences. *Journal of Experimental Social Psychology, 48*, 13-18.
- Winter, L., & Uleman, J. S. (1984). When are social judgments made? Evidence for the spontaneity of trait inferences. *Journal of Personality and Social Psychology, 47*, 237-252.

【2017年8月30日受付, 11月10日受理】

Examining the effects of psychological distance on person perception from the perspective of the Construal Level Theory

TANIGUCHI Yuri & IKEGAMI Tomoko

The Construal Level Theory (CLT) purports that the psychological distance from an observed target determines how the target is construed and represented in memory. Accordingly, it is likely that distant targets are represented in an abstract manner in terms of their central features, while near targets are represented in a concrete manner in terms of their peripheral features. Recently, some empirical studies have focused on the effects of psychological distance on the process of person perception based on the CLT. Unfortunately, the findings are not yet well integrated into a unified theoretical account. This article reviews a number of empirical studies that investigated how the perceived distance from observed behavioral events influences the inferences derived about actors, and then discusses the implications of the findings for the existent theoretical models of person perception and future directions in the field.